忠孝小梯

一

贈中路幸一君　堤千曲橋

川合海素

源氏物語むらさき小橋の序

はるのうらゝかなる物がたりぬみそぎせふ
おほう中にめれるひとわぬけ
ものくぃとものくぃ心ちるくぐるく
おもすろよい。此源氏の物がたりにあん
あめりるめれば。それをものうら張

全九冊

○序一

こゝろ書も。それ世代につゞく
あまたのもゝ。ひろせ濱の貝
え。むろくどもつれぞ。庵ふるぬ沖
のみるめは。うづきえぐれみぢみ
しあもぜ。ちゐあうみこのこゝろ
く。世の変れるが恵髮の。むら

ずもたるふ。みぶれるあぢと
まづきるを。ゐが給乃屋の春世君
は。天の下れ和ゐ人みて。そとよ
ゐやとごろのいとくかうふい
すもぐちはやぶる神代世みき
をはじめて。いめくの書やりぬみ

紙。とゝあ一うくたまゝまゝに。紫乃
ふうれんをとゝ。ようはとわえて。のゝ
あゐれるゞ思うく紙。ぶくかもま
ようゝすぐ。ちくぶくそれぐぶたゝる。
以先ぐくゐ形むのゝ柳をこたゝ
ゝくうう。おたまゝようぶくごゝなれ

石ゝのゝ。おゝ泊よする。庚田北里手
しらせたゝ。毛かゝ
松平の家より。のうくふきうゝ及び
て。ふんごろにとひるふぶ家の
君しゝめゝわゝゝやゝとゝいらむ
やくにゝとゐなくて。あ君たゝ乃

年久しくとりもしてたまはばの計
ひをぞうけ申さうらふ。あの
づりしのごひきよあてをまをおく
るとおもひくふせにひろめて。ひとも
よのくらゐあうとあてんとあわ
ずらくれ申ありよるとぞうらふ。ちみそく

のうたてなるになんあるをりふし。
おのれはうぶ。ごろはあずわをふ
うくおのむんぶ。ぶ(ま)ーとそうれき
あまるに。はあんのうよれはづう
しはぜもおすれてぶわけなきちぢ
れそしがきぶのよいそうあふら

しつのをやにはぬまるもて音後の
中むしに玉柏ちよたてしづまり
いまをこの御

神代宮人

反井弓雨

源氏物語玉ぐし小櫛一の巻

そのゝ〻ぐ〻ものがたりを祢てみぐるまゝ
さぐるにこゝろ乃をぐ〻ぐ

本居宣長

きべての物語書ぐ事

中むかしぐ〻ぐ物語といひて一ぐさぐ〻ぐ事ぐ〻ぐ物ぐ〻ぐ事とハ今の
世ぐ〻ぐ〻ぐ〻

まりとはさぐふはちゝ袴などいとゝぬるき袖にもてて延喜の
ようにこれとの袖そぞろしうるのわかのゐぐひあるたゞ物語ども此
原氏のようまたふるゝそぐ〳〵多くきゝとやてそのゐどもけるとき
うゝんゝれど後の世ふは伝ひつゝぬぞおかゝる又ほゞ後ようより後
の袖も多くして今は世ふもこゝもとけるのとまり栄花袖語乃
煙の後の巻ふ物語合せゝて今けるゝゝ作りて花かとゝきに古
人合せるぐせるせ給ひて いとおゝかりなどいつるばえとばそのころ
もおゝく作りもしもまたしもなくの物語のまるおのゝきるゝづ
けりて さるぐなるもどもいづもも苦ようふ者ゝるをかるよゝ
ふてけるはいとゝうかゝちきゝ事代ようどろふしてつくりかへゝ

もかきわるはちゐをかゝもゝかへもゝてかきわるはみるぐ作りも
ゝ又まれふゝきゝ出くをそのまゝふるもゝてやうゝ作る中ふよ
づ多くはつくりるもゝしさてそはいり作る絵るゐ袖うて行乃とめ
ふよむものぞといふふ大うゝ袖ぐるとは世ゝ中ふをりとけるよるる
あゝけるすゐ色づゝしきゝをうゝきゝおゝゝろきるけるるす
形どのさるぐ代出けるけりてそのさるを絵ふもうきまぐへなぐど
ゝてけるもぐ形るゐどのもてけるそびふゝ又そんのむをぐきて
袖おもうきをうゐどのなぐさめふもゝ世中ゝあるやうをも
んけて ものけりをもるものなりかゝていづをの袖語も男
女ゐるゝひるす代もゝおゝく出るはよゝ世ゝ集を

うりも、高の方は多きゝ、同じきゝ事なれども、人の情のふゝかゝ所
ゝ、高ふまさるハなほうをばし、をべゝ、うをもゝ、猶つぎゝ、う、
ゝゝいふべし。

此源氏の物語の作りぬゝ

此物語を、紫式部が作りたまひしとハ、学ふ者の孫ゝ、ものをいふ
て、をやゝみづゝ、日記ふも、そのおりむきふ、ことば、論あきを、
ゝをふつきても、をさゝの説あり、まゝ、字治大納言の娘ゝ、
源氏ハ、銭、ある当時、ゝをば作りて、ゝ、ゝ、ゝを、女の式部
よかをゝ、いゝ、花ある飯物ふ引、をへ、さ、ど、世俗用ふべ
ゝゝ、かの出ふも、ゝ、ゝ、ゝ

をとゝ殺ぐ。まさうざゑなりとぞ。彼が後の人の作とする也。式部が事
ゝ八。慨べくとゝ。いとゝよなり。

紫式部が事

紫式部系図を。法師ゝ。ゝ。父爲時がす。越後守ゝ。又淺茅
寺ゝといつゝ。越後ゝ。越後ゝ八。ゝゝ抜き。系八の也。式部が兄の惟規が
家のゝ。ゝ。ゝ。越後ゝ。越後ゝ。越前ゝ八。諸号後の也乃
也ゝ。ゝ。ゝ。越後ゝ。越前ゝ。越前ゝ。越後ゝ。越前ゝ。越後ゝ。越前ゝ。
ゝ。式宣孝八。良門の五世の孫ゝ。勧修寺ゝ。系の先祖し。式部。上東
門院ゝ。ゝ。ゝ。

ぶくよむべくして信濃の納言殿の例
なり。ゆゑなきぶえのまぐうなどハよむべきふうにて男女共に江帥後大
納言生中納言などのことばにみて名ふら名なり。また又紫をいつるよ
しハ河海抄ふ一説云ニ紫式部といつるを幽玄ぶかくぞなりて。藤の花
の色ゆゑなるとふ紫の字ふわかくめ侍とかの今ふ此説ハ紫といい
ふよりて思ひよりておしえかりふいつるものしを性をよぶふ形ふの幽玄
ぶかくぞなりつるむ。ゆふ藤をみやびなるものなりなるをや。又清輔朝臣の
袋冊子ふ紫式部といふ名ふ二説あり。一ハ此物語ふ紫老を作
る。故ふ名なり。此名をえしなり。一ハ一條院の伊乳母ゆゑなり。
ちうしして上東門院ふまいらしむるとゆゑなるものしふなれく

おぼしをせくやまさしめ給ふ名ふ付給ふ。武蔵野ゆ義しとかの。此
二つのうち。結ぶこの前の説ハ。ちうぐひめの。河海ふ。一説のうち。紫上
のゆ。式部ぐ。紫式部を改名て。紫式部と号せ
らるしなりとかの。今ふふふ紫上のゆを。ぐ。ふて。かるなりといふ。さも
きべし。ふ紫老を作る故ふ。ふ紫老といふ。ふ紫老
のゆ。ふ故ふ名なりとかの。ふて伊乳母のゆなりなりふ。一條のみかど
のゆ。ゆゑゆゑゆゆゆ

むかしまたの一ときゆきふむさくのまいみなどの道をそなるといふ
なりけりとふて、ことよりは紫をゆるとていひなりはきり紫式部日記より。
花鳥つ巻。公任卿 あれはうしとけりとふとうむかしまたやさかふかはいうかぐ
ひかふ源氏ふ〜源べき人をしらはねふかのうへも 紫上 まいていうで柏〜
給ひむと笑ふ〜はうといつと此日記の文をつけてもゆるとは説まりて
おぼゆるし。さ故ハゆるは説よるときハ紫〜いふ名は紫上ハはづう
らぬこと物をそもとよきへてのさまへるぞ奥なる。さべてしふふもこ
ろあ〜ぬこと紙をづ〜ふよきへ〜いふをてそ。奥〜ハとれもを紫
上のすぢさぐもそもふらりてのなかむりハふふもてふ紫
くのるつるなふ乃をづらしぎりうう〜を。

此物語いつ物るよふふて作をりといふて。さぐうふもりがく〜うるを
上東門院ふさふ〜ふ時。大斎院より。をづうる柏後やく〜のぞ中世
ふつるをりふ作をてをはりといふ説をぐ〜記る。うは七御ふ。
ふ〜〜〜記まへるがごと〜又西宮殿ふ〜をとはきは。をもをはり
といつるハ時代もふがつはるハ石山ふこもりてかをとをいひ大般若経の
料紙ふかをとはぐいつる。みる妄説し行成て清書といふ。此人名をま
をかきなるふ作をりていつるはべ〜。又は石山ふ作をりしも。
八月十五夜の月。湖ふうつりて。人のさまはりまるまふ物語の風
情のふふうかひをバまぐ須磨明石の巻紀。さき始光る君ふ須磨

巻ふことひとつ十五番ありとおぼしき出てゝ作者といふ物どもいくつかうきたびたまひこと八十五番にして十五番ふ出る永徳とをば神吉社をふかせ給ふ日形の先とする形どをも四月のの日ふかせたりとせんかいとをさきてしまし又今石山ふ源氏間といふ者て式部が像をまくその机硯などてあるハみなかの説ふよりて事始むものゝ作なるし又源氏君を西ふ大臣ふ形をくへるハ世ふ形をゞ紫上を式部ゝづくりよそへてくきり形どいふいとをこし。いつてまるあふきあきとをバ思ひよるむ。

作者時世

此物語寛弘のすゑ名ふいできて康和乃末に流布をゝ河海ふをて法師ゝをもふ作りたり今式部日記をもて考ふふ寛弘の始ゝ出ふ出来るハいふ長保の末寛弘乃始なるべしといつり紫式人紫物語用ゝの別也ゝ考ふ物語る源氏もかくやをきんとゝ見るとゝるハ長徳二年四月ゝ形をバそをよりきたふ寛弘ゝ此物語ゝ紫ふ流布をゝ寛弘乃すゑ名ふ作まるゝいふゝ寛弘ゝしゝいふゝハ中ゝふとゝ紫花物語作まるゝ長徳二年なるべゝそをもいとをゝ紫也ゝ寛弘より後ふ出来るをバ形てあることゝ作るむさて康和乃末に流布ゝとゝるハいふゝ日記のおもむき式部ゝみやづゝへゝをゝほどゝやゝ乃内ゝハ乃ゝまるゝ方に見るをや又

はかゝるまてにうそぶくこハ後世つくりものなりしといふ説もいうゝ
がしこゝも後成つけ云る事なるへし又定家卿の賞美の詞あゝ
乃ちこれまて伊のゆゑりなくおゝえかりふいつることなるべし

此物語の名ゆゑ

たゝるもなくけ相伝の名の侍おゝくハ主人公なていふ人の
名をもてたきゝり此相ゝりもこのでゝ光源氏君ゆゑをむ
ゆゑなてゝきる所ゝ源氏の相ゝりといふ也此君の名光といふゆゑ
桐壺光かゝなゝ所ゝさハとゝへむゝなゝ所ゝうつゝゝきゆる所ゝ世ゆゑ人
ゆゑる君ゝきゝゝとゝ又ゆゑる君といふ名ゝ言葉人乃光できゝ
えて侍ゝ事ゝりゝゝそゝゝとゝ二説ゝえむゝゝりゝ光りゝそ

世ゆゑ人乃ゝ光ゆゑる君といふ名ゝ光ゝゝ人乃ゝ侍をゝりゝゝゝ心ゝいふ
ゝゝべし かくて光ゝふけ君乃ゝゝゝ源氏君ゝゝ詞ふゝ多ゝゆゑる光
いつゝ御紫姫光かゝのゝゝあひまゝゝてつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふ又母ひゝゝ光ゝゝ出ゝ人ゝゝ葵光に一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

べきふわ〳〵びとといふ人あるとぞ。さるをもとうぢぞ。やく俗ものぬしは日記ふも。さぐ源氏の物がたりといつるをや。

准摂

此物語抄うり。准摂といつるこゝろは。ゐる人だ光源氏といつる人を物がたりとぞ。西宮左大臣高明公ふるそへてしるわといふるびしされど物がたりふもるくゝはるとぞ。みるもとぐくなるゝへて。あてゝるるあるにもうゝびと。大ゝふはくりるなる中ふいとゝうはるをよりあるゝしも。そのまをうへおどもそくきることうわ。又ゝはゝぞ一人を一人うあゝ俗ものふるうゝびと。源氏君一ゝ物のうへふいうへの人をうへふきゝるるどもをやまをもうゝふもゝ老て。一ゝづゝうわるこゝもうゝて。きべて定まれるこゝハうゝぎるしおわるゝ准摂といつるハ。ゝぐ俗ものぬしはんのうちふうるゝ也。必ゝも後ふゝをもおくぐく考へあれべきふゝもうゝびとそもかくてもきべきものども。苦よりさぐゝうるゝるなり。今もそのおもむきをいとゝうゝもさてつのでふいもゝ。五條ゝ。夕顔君の跡。佐藤浦ふ。源氏君の跡。長谷（ハツセ）ふ。ものらはまはれ。などいひてゝるゝさびしきみる事ぬ。ものゝ。ものをのぐゝうぞゝいふゝゝをゝぐふゝもまへざるもゝぐゝし。ゝれゝハむぎふゝもきぬきるる物をバ。人のおどふべきふるうゝぎあるをかくいつゝをゝぐゝうひまれびゝとゝをふ。おどろくきるのゝぞ。

ゝゝぐ物事

よふ此抱侍を、源氏六十帖くいひて、そハ天台ゟ六十老ゟ撰ミくいふ説。
ゑがてし、此抱侍も、五十ゟ帖てそうつ、六十帖ハよ〳〵おきをかの天台の書
ふ〻ひて合ものとてさハいひきるふてそハわ〳〵ゑん。ゑとひ京帖わ〳〵む
ものと、天台のゟはるゟハいと抱ぞう〳〵。又巻くの例、史記乃本紀世家列傳
ふよゟ〳〵いふもうつくゝぬくゝしきべてさやうゟはるゟハ、後ろ〳〵うつくいへど、
ゟはるくゝもうつへるくゝもあるゟあるものとそハおのづゝふてそうつ、それゟ
かくどもゟ、ものとにゟれもなどいふものぢハ、ものとうつくゝぬくゝし。堅横の英
のるゟ、さ〳〵も用おきるゟれど、むゝくゝるとくゝるどうつくゝるものとバ、一ものゟ
くゝろえおくべし。抱侍の人〳〵ゟ系図ハ、ゟゟ〳〵ふおぞえおくべきこと
なゟ、ものとの人〳〵の系図をものでハ、まぞ〳〵きくゝおゟく、又こゟゟ形るくゝ後

ぞ〳〵乃ものぞ〳〵ものし、ゟるふゟ系図ハ、ものとくゝるくゝおゟく、ものり〳〵
誤りもものて、人のものぞふくゝものて、後の抄ぞとゟ、或ものを改め考へゟぞものを世〳〵ゟ
くゝものとゟ、ゟゟ金かゝぞ、こものふゟゟておのものつうつくゝふゟくゝ〳〵かゟ
むゝ、定ものて、新系図を作〳〵抱侍〳〵ゟ、ものくゝ〳〵ものくゝ〳〵ものとくゝるものて、い
ものぞものくゝものぞ。人〳〵ゟ年齢（ヨハヒ）ものくゝ紀年（トレシダテ）ゟ、作ものて抱侍ゟぞ〳〵ゟ
合ものくゝものくゝる物ものものバ、ものゟものぞ〳〵ゟバものべ〳〵ものべ〳〵ものバものくゝ〳〵ものくゝものぞ
て、後成恩寺殿の作〳〵ものくゝ〳〵ものくゝつる年ものうつくゝ、ものとぞものくゝものて誤りおゟくゝて、
抱乃ものくゝふ〳〵ものくゝものくゝハ、ものくゝふまがひくゝるものくゝ、ものくゝ〳〵ものくゝ、ものくゝ抱侍ゟ考へゟものぞ
ものくゝものくゝれどもものくゝ、ものくゝゟよゟ〳〵ものくゝ〳〵ものくゝものくゝるものぞものくゝるものくゝ、ものくゝ考へ
ものくゝものくゝ〳〵ものくゝものくゝ、ものくゝものくゝものくゝものくゝものくゝものくゝものくゝものくゝものくゝ

むしくえの圖をも抽して、こもうとつ。本ハむろ〳〵河内本といふ
く。表紙といふて、大〳〵二やう有〳〵そで。其中ハ定家中納言乃本
なるを丸て、ちらき法抄あべてよきかつきぱいたぞ。ひとぶるに表紙乃
くさをそうまとくさるなる物ハいふぞや。いづれも本ハかれよきかつきふ法
きてこそ。そりも丸てもまべきとざあるとかゝるべそのぬしふようてきと
むべきうハわゝざるをやかゝて今の世ふある本ぞと。摺る写〳〵なる。かつま
と物る洲おの〳〵そ丸ぐ〳〵ふ。まこゝづ乃異(カハリ)をて。とぐひふよにとあ
しきをこゝるをおのをかるとよを合せて。ことこれ異物(コト)そうぐ。中
ふよきをそうて。そ〳〵つる。そのくぐり別ておくふ抽しつ。まべて俗字が
きけふるき書ぐも。今ハ世ふつゝるるいづれも〳〵写〳〵誤まるこおち

ることなどおゝくして。よみうきがゝにふ〳〵おかゝふ此物語をしも。
よゝけ人〳〵けふ。ふゆ〳〵そで〳〵きて。そろ〳〵もちひ〳〵ゑ。こゝ。およなう
望〳〵。まにや。つぐ〳〵書ぐとふ〳〵ぶまバ。写〳〵誤ぐ。ぐ〳〵物〳〵ゑむ
をそろ。けをぐ物ゑ。そが写〳〵とゝ。ゑ。ゝそて物きゑハあぐ〳〵。

註釋

ちゝ〳〵ハ河海抄ぞ第一の抽る。そをよりきゝふも。ことかをゝうをぐ
を。そろ〳〵ぐ〳〵〳〵ざる洲。けふ抄ハやまをもろ〳〵。儒佛乃を
ろ〳〵けふ書ぐをひろ〳〵考へつぐて。何すも。まを〳〵のゝれるく
ま物く。解(トキ)あき〳〵そ〳〵ゝまてハ花を餘情あるを。河海乃誤まる
そ〳〵物をうにまゝ。もを〳〵ゝるるぐを洲考へゝ〳〵へぐ。をべてをよ

[illegible]ばかりにて、此二つの抄ものがたりばかりにてはなにものしる。但し、説もいまだおろかなり。注のなどかきそへたるもおろかなるのみおかるるなり。

用ひがたし。その後、曙花抄・細流抄・河海抄・花鳥抄説をもかんがへ合せて考へ合せ、また又明星抄・孟津抄・岷江入楚・万水一露・湖月抄などなかからさぐり、頭書や何やらと多くの説をきぐ、はしぬきぬきを引出て、さまざまもとをたづねて、つづくはるのみしるしなり。その中に、今世中に行はるる系図ハ、湖月抄をしたがふ。此抄ものの説ものもろもろの抄ものを、行はるる系図によりたがふ。頭と傍らとふりかへ出。師説今按をもまじへ、もろもろ又もろふるよりよれるかぞ書ものしるしたる。又繁伸もろもろしの源註拾遺といふ物ハ、もとづくもろもろ注するかたづけ、もろもろ説のぬかをとるべ、説まるべどもをもろもろ。説まるべ人解する物し、此人もよふもとりもろもろ人をバ、そのもろもろこれ、もろもろ考へ、もろもろこの人乃わかりはきる書どもハ、近き世はもろもろ説をバ、もろもろふもろもろ行はるる。古き書ハ説アカシとして、新ふるの説を、もろもろおろかなし。又また、もろもろもいつる。紫式七編といふもの一色、これハ注釋ふもろもろ、もろもろ此物語のたまものを編じ、紫式部が才徳なぐ、日記を引出て、もろもろ考へ、昔よりは妄説ミダリゴトどもをわきまへなど、まかりて、一ふ一行ばかり抱し、もろもろ新もろもろ、そのおもむき、もろもろ人乃、書ども作まる例をのこ思ひて、物語といふ物乃説をおもひなぐ、物のいはれをもむかしとかきるもとをバいまざまもろもろものふ

して、諷諭とえんとするハ、おほく儒者どもなり。又吾師縣居翁も、
此物語の註釋といふ物あるこゝハ、もやゝよわきけれど、いさゝか世を
えんぜ、ものゝ總考といふ一書をこゝろゝ、その說大こと繁冲君章
がいるふ〳〵もの、新釋の例をもあげらるゝ。又熊澤了介といふ人の、
外傳といふ物をもものしたれど、そもゝ、ものゝ傷者ども多くあるべし。
ものゝ乃ゐ考ハ、さらに用ひしこゝろおきて、ものゝ沈おきて、ものゝ拍ども
もなほ有べきし、そもゝ〳〵かくもあるべのゆゑどもハいとこゝらうるとども、
おのゝこゝろべの一ものゝ中にあるわ、文章(フミコトバ)ども、やうなるこゝろ多べ、他と
ぬ〳〵ふ〳〵んをこゝろるふ、おもむきおどろきまゝ多〳〵まじハ、ま
どゆきこゝハぬるものゝ多ゝ考もだ、こゝ注釋ふのゝをかりて、るのゝ

の物語ときふしてやむ尽きにをうゝび、あやこまやゝおゝこゝろ
をおく深〳〵ゐゆゑバ、えもいそぬあぢひ乃ゐるゆゑぞゝ。

引言といふものゝ多

物語の何の中ふ、古き多ゝ、こゝ一句おどと引出て、まこゝ〳〵ゐの一首(ヒトウタ)ゝを
をこゝ考ゝ、ゐるハその句のつゞきゝ何のこゝろをもゝ考おどゝ〳〵ゐるゝ、引多こい
ゝて、ものゝハ、大こゝ河海おふ引出さゝ、まゝふもゝるなど、花ゐる
ふゝ出ゝり、ものゝ後〳〵のおどもふ、ゐるされゝるハ、皆河海花ゐふ出るを
ゐるゝ、ゆゝふ河海おふ出さゝゝ引多ゝ、おゝなもゝ又何のゐるべ
ゐて〳〵ものゝ、ゐるハ、ものゝ〳〵かのゐゝ、本末をゝゐまどべ〳〵引ゐるゝ、あ
ゐゝを又古多ふゐゐて、ものゝ、ぬえせゐおどもゝ、ものゝ、べてゝ〳〵みどり

ある上けるハ繁伸もいつるごとくふうべめつるがゐがつるみど
をそのまゝふゆゐりかくまるされるものゝぞおゞ物る。物るを後の抄ど
もふもその考へるゝ。ゝぐ河海乃中ふうゝもるそもも又みゞり物るうぞ
物りまゞゝそのんゝてえべゝまて又河海そかのおりも引ゐ未
動ゝまるけもて。いう物る事乃何ゝもゝもぬもまりゝいるハ狐
よゝかむうへゝ引出まりゝきゐゞなり。

湖月抄のゝ

此物語今の世ことかをあるゝ世本ゞもいる中ふゝまるもよれまく
ふおゝゝハ湖月抄をゝるるもし。そをふつきて。ゝ後うべきるゞもわ
ゐ。まゞ此抄の中おかゝそよ後しれ中ふをりゝいるきる。又

河のおちゝるゝ後おゞいるハ今化本とよみゝべゝ。みるえり出て。
奥ふゝるまるゞゝ。又此抄。まべて句讀いゝみゞりふゝて。侵おや
ゝ中ゐゝ句によりていゝゝ倍のゝ沸も侵るゝゝ。そのんゝて
よむべゝ。清濁も。ゝうきゝてあり。候字ゞひ乃ゝをゞゝくゝるがへ
氣ゝ後の世乃おゝゝべゝるゝて物ゝバ。ゝ見て。いふ居きふわゝゞさゝい
ゐゐる引ゐの例ふゝの点をかゐゝと歌ふ引ゐゐゝねゝ後おゝ。
引ゐゝハ古き事ふゝりている何ゝて。物ゝゞゝ事ハよゝでハき
こえぬ所。物ふ此抄。河海花鳥物ゞふ引ゐとハゝふゝゞ何乃
例ゐゞふ。古事沢引ゝるもゝ。その見ハよゝ。引ゐゝいふ物ゝゝ。ゝ乃
おんゝて。うゝ点をかけゝるゝ後の考きも。又後の中ふ河海抄花

音錦情あぐふ行るゆを引風ふそ河まと花と標（ヒル）とべきゆぐ野ふ。
そゆきばおきて後のおふ引るかふよりて哢わるハ細あぐ寄きる
るつよしさとバ哢細あぐて引るふそ河海花をみ説おわし
とんばべし。たるとこ行けるすぐと今ゆひるゆ小一ッ二ッゆ一ゆ。
あわもけるゆ学ハ行ゆ学ハ行ゆもんばべきもけておのゆ今代小柳を
物ゆるふも学ふあるよくるゆ本野ゆ思うり。るよりよかるむ。ゆ
ふ行ゆもゆ。此湖月物ふ法きていふてあり。ゆ。ゆ。ゆのゆ。
とゆゆるゆひゆと。

大和物語

此物語乃おわもよ。むゆ。よわ。説ぐと行ゆとぐゆ。みゆ拙作といふと
のゆ。ゆ行ぐへを。ゆむづよぐて。ぐよあつよ乃儒佛ゆぐ物書
のおもむきをもて。倫ぐゆゆるハ作ゆ本（ホイ）とふ行ゆ。ゆ
まゆ。ゆ儒佛物ぐの中。おのづゆハ物ゆるゆ。会ゆる話ゆあと
ぐと。そをゆ。ゆ。ゆべてをつふべきふハ行ゆ。ゆ。ゆの話ゆかのゆとび
とハ行ゆ異（コト）ゆるものゆて。ゆべて物作ゆ又別（ヒト）ふ物ぐゆわ物一つの話
のゆるゆふ。ゆて。ゆぐ。ゆふゆいゆうゆるゆぐ。ゆて古（ル）物作ゆ。
ゆらゆるゆ中ふゆ。此源氏のゆ。一ゆはふゆ。ゆを行て作ゆる拙
ゆ。ゆて。ゆのゆ。ハ行ゆ。ふゆふゆゆ。ゆべ。ゆて。ゆべて拙作

ぞとのおもむき、みそなをよくしる人のんだへ、ゑぐハ、源氏の抽ごゝろ
の、をくゝそゝぐふかしるをもてさるべし。今そのことかゝ引
出て、そのうちをもゝをもゝうつしてさゝむ。蓬生、花ふいそゝ、をゝ
きゆゑ、ものごゝろ、おどやうゝ、けたゝゝすゝ、ふてゝそ、ほとゝぎすをもま
ぎらハし、かゝ、永をもひをも、見ひなぐさむるなど、おなじ。
かゝ、流をもひとハ、未描もの、君ゝ、ゝがゝくゝ、さびゝきをもひをいふも。
抽陰をよみて、さる人のんを、おぐさむゆゑを、ゝゞ、ゝゝるさゑの
ゝゝゝるをよゑバ、ゑふをゝゞゞゝゝゝ、ゝ、のゝとびもをゝと
やうふ見ひて、んのをゝぐさゝ、
絵合巻にいゝゝ、かの絵の日記ゝゝ、をゝで今ゝむ人ぶをゝもの

見ひをゝむ人を、絵をゝむきゝ、ゝをゝしまいてゝ。
絵の日記を、源氏、ゑの、絵の日記ゝ、をゝで今ゝむ
とハ、そのをゝゝをゝゝハをゝで、今をゝ、ゝ日記ゝをゝむ人ぶ
をゝ、をゝて、をゝのをゝをゝ、をゝゝゝゝゝゝ人のゝむんをゝし。
こゝゝのをゝゝいをゝ、ゝ抽陰をゝんゝゝゝゝゝ、ゝ人のゝゝをゝ。
よの中ゝゝるやうゝ、ゝゝ絵へゝ。
をゝゝ抽陰ハ、ゝゝゝるゝ、人のをゝゝゝんをゝゝゝゝゝかをゝるものをゝゝ
ゝよゑバ、おのゝゝゝゝゝの中ゝをゝゝをゝゝゝゝゝ、人のをゝゝ情
のゝるやうをゝゝゝをゝゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人乃。
むをゝゝおもゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

嘗書ふ云。書面例のごとくよりくもいつくしてこゝかとおくつまで
なるべバ法方く。絵相ぐるわ形ぐの書ときて。世しゝくしめふ。いそ。
こよ社〳〵相俗乃。絵うてゐるを。ゐとよ〳〵かきゐる志うれとて。たらんぞ。
ちひさに如黒の。行ん。もなくて。もゐ〳〵絵へるゐゐを。むゐ〳〵はわり
きゐおぐ〳〵いで〳〵如黒をえんめふ。

下野如黒ハ紫上うて。むゐ〳〵はをまゐとハ。みづゐ〳〵はいきみ形ゐ
〳〵ほぐのゐとおぐ〳〵出るゐ。

高本枝書に云。芳物俗ぐを。ゐるふも。よのつよはけんぐ〳〵添きおや
ぐふ。時ふゐゐひ。人ゐ。ちぐへバ。おゐふのをを。ゐれ。ゐて。ゐ。

こも物俗をゐて。芳の中はわるやゐ。志まる。

下はゐ菓書ふいゐ〳〵。対ゐハ。俗のおも〳〵きさぬ形ハ。よひめ〳〵絵
えて。人〳〵ふ相ぐゐを形どよゐをきて。ゐめふ。かく世乃とゐひふ。ひあ
つえゐる。むゐ〳〵もの俗ゐ。ゐも。ゐぐゐる男色このを。ふゐんわる人よ
かぐ〳〵ひゐる如ゐやゐ形ゐる。ゐ。世ひわつめゐる。ふも。世ひよハゐる
ゐを。ゐて。ゐを。ゐ。ゐ。あやし〳〵ゐ。ゐて。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

かく〳〵ふゐ下。紫上の相俗をよむを。世絵ひて。のんし。ゐゐ形ゐ
ハ。ゐがやゐ形ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

みぐ〳〵のは月のゐ。し。

夕霧書ふいゐ〳〵。ゐ。ゐの人ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

そハ。むゐ〳〵相俗ふ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

かゝりつゝ人〻とうに女房がらの、よむをもきくふゝ形〻びゝやうゝ
るゝ所いひゝるゝさゝもゝゝゝゝざわきむゝふゝゝおゝゝかゝ法をぎ
ふわゝをもる抱乃ゝゝるゝゝぬべき世界事とんゝゝゝねべゝ孫
角巻云ゝ後の世ゝゝる光ゝゝにいひゝる人もゝゝゝゝば苦抱ゝるゝど
ふゝゝくゝゝふをゝ光きゝて法ゝゝる出ゝゝる人ゝゝゝゝひふゝゝゝはゝゝり
ぬべゝゝゝゝと又云ゝゝふゝゝるゝゝゝゝ人乃んをのぶゝゝゝゝわゝゝきゝるを
おもひいでゝゝゝ

此ゝゝゝゝゝふゝゝき事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝど古物語ゝゝゝゝゝ
宿木巻云ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゐる況いとよく思ひよせらるゝ。ゑがばうおぼゝなびく人乃ゆゝ
きゝがばとおもふ身ぞうちをゝき。

ゆゝとハ蓋、元の如一、元を思ひぬるんし。

ほのぼのとかいちゝむうゝ抱ぐゝわれうちもちるかゐとのゝまふ。
夏深橘花元元ぞかゝゝものゝるとふゝるゞのふおきうわるむ人
のゝとゝひを思ひ出て。さやう形るるふやゝ。えづゝしがり付てゝ。
ゐゞうり。たゝゝと抱後をよみゝるんだへゝ。ぢけゞゝ。昔ゆるを今
のゝが身ふをきゝて。ぢゝゝへゝ。昔ゆ人の抱のゆゝをも思ひや
ゝ。おのゞ身ゆゝうゝをもむうゝふゝゞて。ものゝわゝれを思ゝう
きゝゝと思ひゐゞきむるゞゞしがゝて。たのゞゝ。ぢゝふ。古抱後を

ゝゝゝる人のゝゝ後ゞへを書法やう。ゝゐゝち今源氏物後をよゐ
む人のんだへゝ。かゝゆゞゝなるべきゝ。ゐゞべし。よゐつゝの儒佛
ゐゞの書法ゝゝゝゝむんだへゝゝゝゝゝを形るものゞかゝし。
さて紫式部が此抱後ゝを本（ホイ）とハ。ゆゝゝゝ。蛍ゝふかきゝゝは
ゝゝゝゝゝゝゝゝふゝゝとハいゝゞして。俗のふる抱後のゝん
を。源氏ゐの。ゐゞゝゆゝゆゝゐふかゝゝゝ形ふかゝゝひて。下ふふゝの抱
後の本ゝ法おゝゝゝゝゝ。ゆゝゝふゝの注釋ゞと。俱（リ）おゝくゝて。作り
ぬゝゆゝ下（ヶ）ゆゝゝゝゝゝゝゝがゞゝゝ後ゞ。今ゝゝふ結ふ文を。ゐる
ゝゝ引ゝて。つゞゝゝゝゝゝを釋（ト）き。下（ヶ）ふこめゝるゐゝ後をゝゝ
ゝて。此抱ゞゝゝよゐむ人乃ゐるべゝゝ。その文かいゝゝゝゐゞ

ふ。をづゝ野る人乃うへなどを。まてふやいつちわふやいひあつめと
氣中ふる。とがをまゝのやう野るハなりきわとえをふ。
こをハ西蔦元ゆ。古相伝ごとをえをひてのんも。
住吉の姫元乃ゝ。からのぎんがゆゝしさ況むぐゝ野ちゝへをふ。
住吉相伝をよみて。とが身ゆちうへふ。芳をゝる況。ひ合を待ふも。
殿をこ野ゝかをゝふかゝ流相ぐゝゆちわつ。佐日かを野をゝ孫バ。
殿ハ源氏元も。かゝ氣もめぐをとハ古相伝の本ぐをとをいふ。
ゆをむつゝ。如ゝを。相うをさがりせぐ。人ゝ。ゆぐむう往世ゝ生れ
うるもの野を。
こをより源氏元の。むづゝゆ元ふのうをふ泊。いつちわおかき。

をぐろゝの相伝を。ろふふう流さ紀相ゆ況。うをさゝ。ゆを也
で。をづゝハ。如ゝいふものを。人をゆぐむうをんをふ生れうるを
のふゝをゝを。かゝのうをふハ。をづかゝ。ゆうをて。古相伝をいひ
おゝゝ結つを。をを。こをうをゝを。佐をぬゝゆ陸ふぬくめゝうる
をゝハ。什源氏相伝をよをむ人のんふうて。をげかゝいひおゝ
うるハ難をうを。をゝつぎゝ。或をほをも。或をおゝも
ゝて。佐ひをハをてがゝきいをれをのべゝう。
うゝら佐中ふ。をゝハいをゝ野ゝむを。かゝ。ゝる。ゝか。氣をぐろ
むゝふんをうつゝ。をかゝを佐ひゝ。ゆつゝうゝきちみぐを髪乃。み
ぐゝを。をゝで。かき佐ふよゝて。をゝひをふをあゝう。

らうひきふくいふうて、さそうしとうぶてのうふ泊るこをも
ふべしぎて抱ろいふまて、こを結ぶる。下人仕係氏物
俵をまげ偽のまぶろぐして、かやうの書にんをうつして、
よまむそ、うぢぎ形きるぎぞと雑ぎるし。
又々ふよのふるあく形でハ、ぶふをうまぎうてしかきつま
げを泊、あぐ法えまし。
ちぐえふいひおくつるハ、ふをうまにてそを祀ぶふ又うやう
の古抱俵をうでハ、つまぐなぐさむよくなうんとこぶ
とハ、抱俵をめづる人ゑ日ん〜る泊し。下人雑ぐるふこ
ふくること形り。

さてもこのいれるどもの中ふぎふさとうるむしとおハも
をうんをつまぐしくつけるをうをかゑ〜ぐ〜ちり形ぐうぐづ
らふんうごき、らうしるぎま形る姫君乃抱ふへるふるをうんつくし。
抱俵をおかるたちりたるこしとハいへども、を中ふぶふをもうるべ
きこ〜ふとて、俵とるすとハ知あぐ、うを泊とふ泊て、んのう
ぐ〜こをしいぐづ〜ふとハ、俵も抱俵をうて、んをうごかをハ、
行のひゑくいぐづ〜形ぐばいふ、古を糸ゆ序ふ結ふをうるを
うゑをうて〜いる。そし、らうしるげ形る姫君のをくハ、古抱ぐる
ふ。をうるちまぐ結ふ半〜うをうるし、んつくも、んうぐ〜も
日ぐやうゆんぐへし、下人、ぎふをうとうるんしとうをれを

見せしいつる。こと源氏物語乃まきにこゝ此物がたりハ。ちう物の所ハ
まことにしるしとむこと。むかしかきたる物のしるすなかおく
ふ別にしたがくいつべし。そもく此物語を勧善懲悪
のこゝろ。はふハ好色のいましめ。むかしことなるもとゝ
の詞にても知べし。物語をよてハ。うつくしとてこゝろにいでゝ
ゝ好色乃いましめふハなゝれ。猶おくふかくハいつべし。
又いとゝ俗ごきるかゝるとおどろくしくこゝろ
なるが。見おどろきてもづふ又まくしびぞ。ふくれど。ぬしをう
きふし。ゆゝしハ好るなども者べし。
こゝ又物語にゆる一種乃すゝ上のぶさもゆゝむく

えゝハ。こゝてあられふ。ゆゝ一種のすゝ。こゝハこゝふおどろくし
く。ゆゝふおもてるすゝ。見おどろきてしぬをうきふ
しとゞくしゆるゝいひきくいつをみづうゝこゝ。人う
よゐせてきくゝもゆゝはゞこゝしゆゝ乃ゐをゆゝくし
おどろくゝもきるハ。今一ゝびゝゞふんまゞきハうるゝ
ものゝ。紙もゞゝ。そもゝ又一ふゝ物奥ぞゝ。下ん源
氏物語ふくきるすゝ。二ゝふふて。そのゝ所のべゝ。二
ゝきハ上ふいつるゞふゆゝむくゝ。ゝ一種ゝよ
む人乃心を感ぎゝ見。ものゝわゝをもゝせゝゝ。ゝうゞ
くゝいつる。ゝ物ゝゝ物のわゝをふ感ぞるゝ。ゝゝふ

いろるおどろくしきるるこうも一種しくて上の一くさぐこの
物語乃本とおもし後の一種をくぐ中代ふ奥ゝ出るるのくし
まるれふまびふきくゝれもふくくしといひて此物語の中
ふまるおどろくしもくえきもむるやうに事ハいくまもふのくきて
しめぐつくををえきくるちぐのくぞおかるるおろ代ようふハくぐ
あやくくえづくくしたるる代をのくぬくえぐ者ぐ
らふつくを代えきくるるれぐをバ奥おきぐ見ふえるる
ものくこるもきくぬおと人をわかく
けぐろををおき人の女房おどふ時くよあるるとくこちきけバ
結物語くいふ物ようづくをかるきもていうくびるをバ女をべ

おどのよもむ物ゝて　うくちまうせてハ男おどの　うぐくえべきお
うくハあくぐるるふかく女房ようを代くるちきをバとハいひ
ゆくまるし物をぐるもまくくれをまくふるわくび男もつる
ふうえるをくまくるもくくをれだ物語を物乃
るめくふ門出をくてくび物語ふも有くえくるるびぐくく
下仏早下なり。
物ようくいふものくゝふわべきうれそくぐ代ようくをるをくるに代
きようぐいひ出をくるもくおびゆをぐをくもていじやくの女へだ。
をくぐぐくハをうれおびくくふくおびくて　んうごき又ある後
じれくくゝ見ひるびくゝ物くおくくゝ見うくやくふうれをせるを。

世ゐハ、そこ〳〵をゐなりて、瑞ゐ侍りをよく〳〵ふ者めわるふてそ
ゐるゐ、ゐるゐ〳〵ふ〳〵、ゐ、ゐをきるゐ、さ〳〵もゐ〳〵じやとハ、まそ思へゐ。
さもゐ〳〵ゐ〳〵ゐやと〳〵ゐゐ、下のゐよむもの、難ゐるゐ、ゐ〳〵
て世ゐをへ乃をとハ、次の御ごもをへゐ〳〵、下にのべゐ。
ゐふゐ〳〵、ゐを御ゐ、ゐる人や、ゐゐ〳〵、ふゐをゐ、ゐ〳〵ん、ゐ〳〵
いゐ〳〵まそ、ゐ〳〵ゐ、ゐひゐ、ゐ〳〵れて、侍をおゐ〳〵やを侍へゐ。
御者、ゐの御し、ゐふ侍をよゐ〳〵ひゐをゐる人を、みゐゐ〳〵のゐゐ
ひゐ〳〵、人のいゐゐゐゐ、ゐゐ、ゐゐ、ゐ、ゐ、

下人、ものしるべく和俗を、えらぶるほどに、よれるあるのをいひ
かしこみむりハ、ゑづくり作る此源氏物語を、道々しくく
さく日本紀などもまさる和々思へるふてそ、世の人う
つぎきゝ、ゑんこゝろをうて、その難をのがれむと考み、
まげくいひおくし。
さる人のうへとて、ひりはまふいひいづるさくてゝ和俗もよれも
あしきとよふふる人の者きるめ、ゑるふるうできくにるうる
ゑるす沢、後の世のもいひつゝへゝせまりしきゆゝぐとんふ
こゝぞくていひおきたゞうやるなり。
上ふゝひまふゝいひて、ゝぐふ此文へでゝきるゝうつうしきや

ゝふ笑ゐるハ、ものゝ此ゝふ、何の為しるふやわゝんよゝきゝぞゝも。
今ゝろゝふおぎ和たゞ、ゆゝふゆゆゆハ、ゆゝふをふてゝうるを俗
ゝふそなゞやゝの何わゝばゝうりはゝしゝゝるべゝさてゝれ
より上ふ和俗をいひおくゝものるハゝる実のゝりハわゝゞ也者ゑ
乃此ゝるふいゝゝんをいまてがきよゝゝのふをゝて、むくゝゝうり
さゝひて、うゝくいひゝる、結つる、ゆゝふをふゝて、ゝふいゝうりて、
ゝゝ人のゝんゝてゝいふよりぞ、実ふ和俗と縁（サダ）ゑものゝふハゝる。
かゝてゝ也ゝくゝの物ゞゝりはゆゞ和る中ふおゝくハ作足るゝ
和る沢、ゝハ紫式部ゞ和俗つゝるゝ下人を、殿ゝさむゝめふかゝ実
ふゝゝゝふつゝきて、ゝる和乃やゝふいゝるし、よれもわゝきもゝく。

きべてよれあるきくいてふんはわりてふよきさまをうけきさま
なるべからるを用ゐ世ゐ別ふくくいふべし。ゐるもあ
うべ。世ゐるをなるふくハふるゐ世ゐ世ゐ。そのまふんよこそてハ。
ゐ〜がゐ〜ふゐゐをいふきべゐ〜ふうゐゆゐるゐ世きゐ世ふ
ゐいゐ世ゐ世ゐ世

なほ物をこそ云ひおもふてはべれ。人うらいひつきむさるのを。をとらひ
ぶかんらぐ〜しかるぬ物はべれまいて野つう〜くをとるべき人さへ
なりまばらぐ物ゆうむうひう〜ひひわるをかわ。なほるとのをぞ。面
をきて〜いうたつをのふ。などうをいてもをるべし。なほるとハ。人うう
うかぶるはべれ。行となく。かきもをいふをいふまた。行すふまれいうし
とやふこの。ふこめてるしがくきをぢハ。今の世は。何の源きんもなき。
たうるは人をもはどてくれて。ゆゑ人で世ふをぐ〜〜〜〜ゆやし
きるれぐ。ゆんゆをるはをがらぬるゆてぶんのうちふ。
あやしきをれがづしきうかるく。ひひ〜のをハやをがく〜て。れ
らぐをやく人うかうわきうせまうく〜ひふものしるハかうう

きうせうをそ。系ふも人うを。何のやくもれをども。ゆををばおの
づう〜んのをう〜ハ。人の情乃おのづう〜はるゆ。ゆう〜いふ和乃
よるう〜もうをを。　下ふん。上ふ。そう〜ぐをよう〜ふうれうるはつきよ
うをぞう〜〜いうるハ。此物語を雖じうををれるゆ。うをとうわしてそ
の芸へはををふて。紫式部は。源氏の物語を作るををとゆをう〜くの
べるものをて。此物語をまをふ詰をう〜でふてハはをども。むげ
ふあゆをもれき。まうぐ後でうをあう〜ぐ。を人のうをと。ゆう〜をを
まして。をはゆうハふてをいをを。みを芸中ふつをふあるうををて。
よきうをはう〜きうをは。目ふはうり耳ふあるゆ。後の世ふもいひ
はう〜をきう〜〜ぐゆ。人のうちふををて。をう〜がうきをう。

抱ぐくわふよせて。そくりどを書法ぞ。結ばバそくぢぞ。そく
ぐゆあ〜ぐ〜と知べし〜とし。結ばバ此抱ぐくをる事どもハみな
紫式部がものがたりの。その代りえるる。笑るる。その人の名
をかくして。きるる抱ぐくといふ。ぐ〜ぐもも。ぐ〜ぐ。そ人乃
そ事といれるなど。〜ぐ〜ぐ。ぐ〜ぐ。ぐ〜ぐ。

ゑハぬまゆゑども、学の人のいふまゝにふようしゐ紫紫式部ハ人うち
とゞめたもうゝゑやまとうゐるとゝゐまゝゝどゐゐどいひうりて、あどうる
がむゝ。

又あゝ記さゐゐけ見づゝ記るゐ沢、そりつつ見える。
あゝきとハかゐゝゝゝ、よのつゐ乃傷佛の出ゐどゐいつゐ悪
行をいつるふハあゝゝゝゝけるゐハおくゐゐくゝいつり。下ゐ未詰む
ゐ近ゐゐゐゐどけるゐゝゝゝ、ゐゐふつゐまり、ゐゐかきべゐよかゝ
ぬゐゐゐりいつるゐハゐゐ人乃ゐ人のつゐゝきゐ
をいひゐゐゐらむ乃ゐゐ弥ゝゐよまむ人乃奥
ふゐりゝハあゝきるけ見づゐ乃けるゐどもを書ゐ

ゐ心人よゐゐがりむゐてハゐいひ見づゐしきゐをゐいつるにてゐ
のゐゐゐゐゐゐゐて上ふいつゐぶゐゐつゐんゐあゐれをゐ
せゐゐゐおゐゐゐゐゐゐゐ

しかるといふてもとつるなり。
みなかぐふつまてけ云はかりの形ぐかし。
そのようきかふつけあきうふはをいつるすぐもうれけせ
ふなきるふをかぐびつるふかるるぞもし。
人乃みるぐはぎえたらりやうかちる。
人のをかぐハ異郷もざえハ人の学問乃
をとざえといつり。たらりやうハ書はぐ他ざえしかるるとき
ざえ乃ふるるつをいふはるるを一つふいつるしかる人
のつらるをるハ文字かるもびまてざえのふりつらりやうは
をまるハ異国はは人乃学問の筋書の他をやうをうはは他他

のおもむき。他をやうをハほぐかるびいをを異るをいりおかる
異国乃書ハ。をるををうを善悪是非をきびををうを論ひ。
物の道理をうぐをりてをかしげふ人ぐふれぐをふいひまを
ひて。風雅のをぢの詩藻のるぐひといへども。皇国乃ふをとよ
をかをりて。ふか情乃おくはらをばかくして。ふをハのべぐ。
うをべをはくろひうぐわて。ふをふをふはらをはをるを。皇
国乃物ぐるを学をハ学はるりまる。人の情乃やう況ありはまをう
書出をるふふ。大をるを他をりはをく。をぐはかるるのを学を
しくはりをぐはを。ををりるるをはるををはをるをはをはりやう
乃ふりまるなり。

同じやまとことばの乃至形容詞むかし今のふりがなるべし。
形容詞を形容詞にかき本ハ倭し。もろ〳〵此書乃ふりがなのま
なべ此同じ皇乃書といへども。苦と今と。俗をやうかられ
ことと形容詞なるべしといふハ。ふりがなを。むかしと今と。の
うるとなるべしものをもまて皇此苦の書といふを上ふりも出
る日本紀などのまぐひをいふ。そハ漢文にて事の
をもを。倭語といふ。かをを。今のといふを。倭語書とのの
日本紀などの乃ぬきにふぶきバ。古倭語も。近き云の倭語ハ
形容詞。下ハを。今のを。今つ。なる此源氏の倭ごとし。
ぬきをとうをにて。まぐをてわ〳〵め。

あ〳〵ハ二つをふ文詞ふて。源きを〳〵ハ異國の書。又日本紀のまぐ
ひ乃。女を形容詞のをやを〳〵。ん倭ごを。漢文なるをいふ。倭きこ
を〳〵ハ。倭語書。つ。女のをぐ。ものをまを。ふを。ふをげを〳〵かる。女をぐ
形容詞。乃ふり。源き。倭きをの。ハいをで。を〳〵いをを。て。文詞
乃ををいふ。を。倭をるべし
をををふをを〳〵ごを〳〵。いひをて。むも。ををのんをびてをむをる。
をのををををごふをハ。俗云ふ。ん倭ををびを。をいふ。ごのをなり。
下ハ。をの人のうへをて〳〵。いををふり。をもをまで。上ふをを〳〵ごを。
をを。雖ごをる。言ふを。形容詞。ふり。〳〵。いひを〳〵。むをびを〳〵わを
てけ。次を。をを〳〵ごを〳〵て。も。むをごふをををを。ハ。ん倭をるをびを

ほうとゝいふ徒ふ（アカシ）その侍を引るし。
佛のうるハしきんまて。それおきたる法ほう方便とゝいふて有て。
うるハしきハ俗ふきれとゝしてもゝかしたとゝいふとし。佛のゝたゝし
きんまわりたぬるほうほう。そゝむとゝいふまゝ。たゝ方ほうとゝ。それふ
しぶ方便とゝいふとのあるとゝ。まゝてしやゝ人をゝふよわてを。
ほうとゝ方便とハなきゝるをも。俗ほいをゝきんとし。そゝ用ゝと
とほうゝ。そゝゝたゝとゝいふとゝ。方便とゝいふとハ。んぎへゝ有あ。そゝゝゝ
とハいふる安徒ほうて。いひとゝ。ゝいきゝる。方便をゝきゝ人ゝ為
ゝゝむとゝふいふとゝ。下ふん。上ふそゝゝゝいるハ。拙徒をゝし
くいひなせる伽ゝゝ。そゝふゝへゝ。とゝハゝとゝふそゝ

ゝゝいふべきしゝゝゝひゝハゝゝ。ゝゝゝくゝゝゝ

方便を実説とハ異なるやうなれども、きハまるところハ、一つとふ
ありとうる。
菩提とぼん悩とをへだてなん。け人のよたわきだかりけと
とハいふなきる。
一つもとハ昂(チ)け菩提と煩悩とをさしていふ。佛の法ハ方便
まぐまぎしらかしとるがふやうけるもとどもきハまるところ
を実説も同じことなれ菩提と煩悩とのへだて法界けちと
説る。一つもなかりおつとしまたけといふもたのしさへを抱へ
合せるなれけとハ物語書沖さしていふし人を抱の中なる
人をしかるわきるとハ抱ぞとふ人のよたとうしきとあいふと

ふるを書るハ、ひけ佛説の菩提と煩悩とのへだてを説キ
るがごとくなし。或人ひきくく抱ばかりもきハまるなり
を人のよたわきを忘れる抱をバこそ抱ちと勧善懲悪ふ
て、漢文の書ぶりと同じきけ抱を儒佛の書く説いふ異
なりといふをいうぐ。善ふ上ふいるぐく抱ばういふきけ
を儒佛のおふいふ善悪是非とハ同じかるこなわきなり。
そのおもむきいふくなとなるし。下人も表けぐく。
よくいへばなべくいるもむなかるぐなりぬやく抱をいやと
るぐとけるふのこまひるつ。
よくいへばくとハ抱をバこうなき妄(ムヤウ)乃物のごくとへぐもよ

くらとなりて、おとろうしつまびさそうぶくのきし、こぞうの
ゐとはそうおきさそひすゐて、うぐで、せでハうおをぬるをいふ。
相傳ゑ、女童ゆもてうそびおまて、そうおきさそひるゐ今かく
源氏、見のよゐでハかゐハぬ相のやうにいひゐ、おふとし。下人物
傳をとりふるゆ、紫式部がんをひふて、上、伴のおぐ、此源氏の相
ぐをと沈よりうゆまにゑ中せをぐもまくハそうおきうぐこと
なりと、甲下しるゑをゐて、爲をゐで、をるし、文のこと沈よりあ
ぢりひうゐちるべ、さて上ふも傳ぎ、いてぐ、巻の此傳を、
下ゆ人うゆ相傳をたらまるんぐへをのべる相うて、一紙の大む
孫ゐ沈、一紙乃そぐ、をゐりかぐ、ゆりもかで、ゆぐかく何とゐき

うゐ沈ふおそをとゐもううぶぶゐぐうふ出ううをるゐ。いとをでる
ゆ、さて苦ゆゆ此傳の注釋ぐも、ぐ一ゐゆ、うゐべをのをゐき
てゆゆゆ、ゆ下のんわうゐぶ、又ゐべて傳ゐてぐも、多る中ふ。
仏説ゆるゐ、いてるゐ沈の注釋ぐも、ぐかの経文のうへ
のをぐゆ沈、ぐぐ、ぐ注してうふ引ゆるゆへのをに
わとゐるハ、一つもなゆ、そも、此傳乃ゐ沈、ゆゆゆるゐぐれぐ。
源氏、相傳一紙のもの、ゆゆゆるゐぶ、をふゆて、今いをゆゐそ
注釋ぐも乃、傳をもゐをむ、ゆ沈、まぐ佛のうるゆきんいへ
氣を、経文をりて、おぐぐ、佛のうへふをきて、注をゐを、ゐる。皆
わゆゆゆゆ、ゆ沈ゐ、ゆいふ何ゐ相ぐゆゆふゐ、ぐ傳ふきつ

をもて五時の教あるべし法華一実ふ帰キ是一説ふ或ハ畢竟
皆空或ハ第法一如なるべし釋しるしるみるべきなり
らぬるべし又菩提煩悩ハ煩悩菩提差別なきことといへり
成佛ハ生死ハ涅槃ハ煩悩菩提差別あるべしるべ
ハ生死ハ涅槃ハ煩悩菩提ハ表裏ハ表裏ハ
ハ生死ハ涅槃ハ煩悩菩提ハ表裏ハ表裏ハ
きるべきなるべしるべしるものなる況差別なしとまてハ
もよしわるべし差別あるべしるべしるものをや
乃文のことをもるべるべし況経文のこゝをのこゝ
まにとれるハるべるべるべるべるべるべるべる

なるべしなるべしなるべしなるべしなるべしなるべ
なるべしなるべしなるべしなるべしなるべしなるべ
なるべしなるべしなるべしなるべしなるべしなるべ
なるべしなるべしなるべしなるべしなるべしなるべ
なるべしなるべしなるべしなるべしなるべしなるべ
なるべしなるべしなるべしなるべしなるべしなるべ
なるべしなるべしなるべしなるべしなるべしなるべ
なるべしなるべしなるべしなるべしなるべしなるべ

許可ゆうきて、宗旨をきはめんとゝ思ひ、天台ゆ法文を、もて書ゝとゝ、ゆるゝ、ゆ仏ぢ、式紙をみぐりゆほ光ゆ、ゆ、ゆ、

ろきなどいふことし又ふかくちかよれあしきこといふも
さしあたり又命ながく富栄え物をはるるすべがどハ皆よれるすし命み
じかくまづしく衰へ物をうしなふなど病災などなどこれらき
るすしたて又人のうへのことをかくしび衣服調度衣服などとちがめ茶乃
うへふおのく皆よれくらしたくハまたしからしび人のんちがのことに
ちかぎくしび又他ふより事ふちり時ふちがびてよくしらしめちりる
てしるまりしるうへを矢まれちを他をよくうちをよくうとし甲冑ハと
ほさぬをよくうし夜ちわつき日ふを元やいうなるをよくうし衣の
をれちうハ熟きものをよくうし衣ルそゆく人ちを雪ルちうし
し形をちのぶものちを月乗をうちしうしちるるるびしを行すふもるル

ちるぎし又ちをバ人のんちるぎのよれうちきを。さバうちうへのさびし
てそうくざを。そくふちるびてかちるうのをて。儒の道ふよ
しちるるすち。佛のをふ。ちうしうちを。仏のをふよくちるるすの。
儒乃をうハ。ちうしをちるるびしをて。一やうなくるがごく。
他後書ふても又よくうし和ちしくしちるるち中ふよのつよ乃儒
佛の善悪ちはかちわるちるるびうしるぎ物ぶ他後をて人のんち
ちるぎちよれわしれちいうなるぎくしつふふ大ちる他のうち後をち
ちを。なうけちて。よの中ち人の情ちかをつをよくうし他のあそ
ちを。ちしちくしび。おちちを。なくて。よのんあちちふうるハぎちし。ちうしと
ちせちをかくいへど。儒仏ちよのそち善悪くいちくしも異なるをぎ

をたちまちがたくなりぬとこそふいもむすめハ世の人の情ふかく
ふくかなてざるこの中ハ儒佛の善惡とハ合ざるこゝもおわく又
きべてよしあしの論むることゝ しやぶなぐこふやきびて儒者な
どの議論のやうハ心ぶるふせまわるをてハ和しさて和俗を和
のつくれを考ぬむ人とハいふこのそぐハいつわてハ儒佛乃
教ハ人をむるるもおかきぞかしそハまづ人の情乃和ハ感ぜ
る事ハ善惡邪正をあぐつる中ハとうわふるもづるすハ感
ぜ儒ぶきるぶ和ぶ情をあがるとぐんふまうせなとつり
ておのづゝ志のびぐれふしまて感ぐるとつるものし源氏乃
うへまていそぐ宮場乃樹月乃花つぐれ中まちぶふんをうきて

是ハつるハ儒佛なぐの道ハていをむるハふうんなきいみしき不
義惡行なれぐハふいぶりわけよれるつるをふてるよきんとは
いひぐるかるべきふこの不義惡行をるをしをもてるきい
るぐしてこぐこのつひぶけ和ふきるれぐ人へを
出のべゝ源氏乃をバむゝよれ人乃中ろけよきるけるぐり
を此乃けるへふるとつるをぐ和俗の人もふしてこの
よれわきハ儒佛なぐの中ハ善惡とからるつるをぐ我心さ
ぐるるしかのるぐひ乃不義をようしるるかをつくぐこのつくれ
てハ今をいをぐもるゝ作るとぐひ乃罪を論ぐるをハおのづ
ゝこのゝ作書ぐとけふふらつるをバ和ぐるき物流をま

つべきにわるべし。物狂ひ、儒佛をぢ、ものしり、まことの道乃やうにまよ
ひをそれとしたるとふ入ぐきのもとかりて、奴婢をも家をも
分をも、をもむべきをしへをとりて、そこよの中のものぐるひ
なるゆゑふまるまぢめ善悪乃論をいきてきかれをどもとして
とかりてぞ、もで、畑のわるを作をもとるかとれをどもとして
うしはしるしひ、ものをへを、拾うしまえていたづ、蓮をうえ
て、老でむしるを人乃、泥をてきくハかりをどる。泥をいとまくハ
なるがだ、畑作をうしまくハ不義なる点を出ふ。そのふごれる泥を、老
でふをかりて、畑のかをとの花をさうせん料ぞかし。係民、点乃
なるまひを、泥をうれひ出る道ひ乃、ようしをでうしまふ

不へるるもどひうて、そのをけふごまるとばさしまいをどしてなさ
きを作くものをとをるかをうしそ、よれ人乃ホンかふしる
ふるく、今いをもをうれとど、作をれふいて、作麻をう。
かの浦へ下を作ふをと、ゆをうてをを、下中をおやを沈そ
をとをる、作石をふそのうしおやをふ畑のをを、をきうて、ものを
がしきるおかるを、三月十三日、神をうれうめき、毎月をがしき乗
う。又をどらわ、后も作物の金ふ形やを作ひをうぐけものくをと
しをきわ作をがしきぢをう。又作自乃なやををへ、ぢうおもくれ
らを作ひうしうを、蓮生、点ふ、ゆる作ををひて、新へうれふと、天の下
のをうこびまて、立をうぐ、高本植、点ふ、学なれつをを作をぬお

そぐをうく。なぞらるがごとく。世間の文ども。見まゝに弗也。此
をいかなるこゝろぞとおもふに。儒佛のこゝろ。ものしるしたる
不義乃ゆるすひとある人を。弗也。此をいかゝ天也。かくわれこゝろ
よハいなぞと書べき。又女うそよりたる人乃ゆゑ。ふいつるゝ。蓮華中宮
業上經。色無無院などゝ。ものゝ中ふかき中ハ。落雲。見かも。かし
こきたゝ。ものゝ。きこゆる中ふかゝ。佛んだへなどの。ものゝ。ものゝ
あるれふおもしまして。がうけふおもしよりて。人のうしへとなるゝ。
おのづからちまぐ。ものをいふこゝろ。おもしろきなく。人乃
ほうまつるゝをも。よのなかひとゝ。べきことゝ。ぐうぐう。何
とおもしまぐ。ものゝ。ものゝ。をもめなるふも。中

ものゝ。きて。かゝるゝと思ハぬ人なし。なぞほ。先ものゝ。とも。又儒仏なぞ
のこゝろ。ひらかゝ。むりハかゝ。ものゝ。よりた人のはらへふ。原氏。ものゝ。ひらかゝ
へるやゝ。ものゝ。不義のゝ。ものゝ。書べきにわゝ。ものゝ。又ゝる不義わるゝ。ものゝ。
よき人のゝ。ものゝ。わゝ。ふいつるゝ。きにわゝ。ものゝ。おかゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
よきものゝ。きハ。儒佛なぞの善悪。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。べく。
又おゝふかゝ。出る。柏木。見ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。乃
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
人ゝ。みる。ひゝなぞふ。儒佛のゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。乃
ゝいふものゝ。おもむきをなぞ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

きくいふこゝふんのつきゝる人のたまふこゝろやまつかまつる
もののくさ〳〵にあるをもぎめきをもとめつゝべき。

明和元年秋村
二子移居三日